

地域ニュース

痛の学 入門講座

◆ 70 ◆

文学作品にみる痛み

人と「痛み」とのつき合いは古い。過去の文学作品のそこそこ、痛みがちよくちよく顔をみ出していることがその証左である。今回は、過去の文学作品をひもといて、当時の人たちがどのような痛みを悩み、いかに痛みと対峙していたのかについて考えてみよう。

古くは「万葉集」。《魂は朝夕に賜ふれど我が胸痛し恋の繁きに》この歌があるが、このでの痛みは切ない心持ちであって、打ち身や切り傷の痛みではない。万葉の時代にはこのように心持ちを表す、または程度の甚しい様(いたく…である)の表現として痛みは用いられていた。しかし、言語学者は「文獻的に見当たらないだけであって、口語として傷の痛みが先にあつて当然」としている。

この時代の歌人・山上憶良も「関節リウマチ」に苦しんだのでは? と考えられている。74歳の時に著した「沈痾自哀分」には、《四肢は動かす全ての関節がひびく痛む》とのくだりがあるのだ。

頭痛やリウマチ…悩みは古く



イラスト 山川 昂

「源氏物語」になると、「風邪で頭が痛い」との記述が2カ所にある。「夕顔」では、風邪をひいた光源氏が、天皇の使いの頭中将に《この暁より、咳病(せき込むこと)にや侍らん、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無礼にて聞てゆるむこと》と言いつて聞かしている。

平安時代には、病氣はすべて「物の怪」によるものとして片付けられた。「枕草紙」(三〇五・病は)の書き出しにも《病は胸。物の怪》とある。

江戸時代には、美しい者は強い者であると考えられ、人々はこぞって入墨を入れた。谷崎潤一郎は、「刺青」でこの時代を描き、痛みを大きなテーマとして扱っている。若い刺青師・清吉は、《刺青のうちでも殊に痛いと言われる朱刺、ほかしほり、…それを用いることを彼は殊更喜ん



森本昌宏(もりもと・まさひろ)
大阪なんばクリニック(06・6648・8930)本部長・院長。平成元年、大阪医科大学大学院修了。同大講師などを経て、22年から近畿大学医学部麻酔科教授。31年4月から現職。日本ペインクリニック学会名誉会員。

だ》。そして、痛みを苦しむ客を足下にして《「さぞお痛みでがしうなあ」といいながら、快さそつに笑っている》とする。

明治時代、夏目漱石は「坊っちゃん」をすぐに痛がったり、疲れたりする人物として描いたが、実は漱石こそが痛みをほじめとするさまざまな症状に悩まされ続けていたのである。加えて、鏡子婦人の頭痛と肩こりも有名であり、彼の作品には多くの頭痛持ちが登場する。たとえば「三四郎」の美禰子であり「それから」の代助、「門」の御米らを見れば明らかだ。

徳富蘆花は、「不如帰」上篇五の四で、主人公・浪子のしゅうとめが持病の偲麻質斯(関節リウマチ)に苦しんでいる様子を《「あのね、川島のおばあさんがね、偲麻質斯で肩が痛むでね、それで近頃は大層氣むづかしいのですと》と描いている。これらは、わが国でも古くから関節リウマチによる痛みに悩まされていた方が多かったことを示している。

石川五右衛門ではないが「涙の真砂は尽きるとも、世に痛み種はつきまじり」である。

第一日曜日に掲載します。